

6 教育改革推進室

教育改革推進室は、平成28年度に「地域と連携した教育体制の整備と展開」が予算措置されたことを受け、平成28年7月に、大学教育・学生支援機構の教育基盤センター及び教育企画室の改編に併せて設置された。大学教育に関する、(1) 教育実施体制及び教育方法、(2) 地域と連携した教育、(3) 社会ニーズを踏まえた教育プログラム及び(4) アクティブラーニングに関する企画立案を行うことが業務となっている。

6.1 教育課程・学習成果に関する取り組み

各講義、演習等が学位授与の方針であるディプロマ・ポリシー及び教育課程編成・実施の方針であるカリキュラム・ポリシーと整合するように、かつ、学生が主体的に学ぶことができるようにシラバスの整備を引き続き進めている。また、ポートフォリオシステムによって、学生が振り返りを通して学修目標を自覚して自学自習できるようにしている。

各教員の講義、演習等に関する授業コンサルテーションを随時受け付けている。特に、アクティブラーニングの導入、推進についての相談活動を実施している。

6.2 内部質保証に関する取り組み

教育活動に関する適切な根拠（資料、情報）を収集するために、教学に関するインスティテューショナル・リサーチ(IR)を実施している。各学部・研究科から集めて分析するべきデータに関する意見を聴取して、入試データ、就職データ等を取り込むことが可能になるように教務システムを改修した。そのうえで、入学から卒業までの学生のGPA推移の分析、入試区分とGPAとの関係についての分析、講義毎の成績評価分布の分析等を行っている。

学習成果を把握する一環として、群馬大学全学卒業時アンケート調査（学部対象）、群馬大学全学修了時アンケート調査（大学院対象）を毎年実施している。また、過去3年間に卒業生・修了生が就職した自治体、教育機関、病院、民間企業等を対象とした群馬大学卒業生・修了生就職先機関アンケート調査を開始した。今後3年毎に1回実施する予定である。以上のようなIR活動を周知するために「教学IRレター vol.1」を発行して、学内で配布している。

また、教育研究活動を推進、点検・評価する各学部・研究科等の組織—医学部医学科カリキュラム評価委員会、医学部IR室会議、数理データ科学教育研究センター会議／数理データ科学教育研究センター運営会議、学生生活実態調査実施WG、ぐんま未来学WG、大学教育センター学部教務委員会、大学教育センター大学院教務委員会、大学教育センター学務教務委員会教養教育部会、大学教育センター学務教務委員教育推進部会—において、教育のPDCAサイクルを機能させる取り組みについての専門的助言を実施している。

資料6-1：シラバスを整備する背景、必要性、意義

資料6-2：教務システム内のポートフォリオシステムの活用について、ポートフォリオの意義（教職員向け）、群馬大学教務システム学生ポートフォリオについて

資料6-3：群馬大学全学卒業時アンケート調査

資料6-4：群馬大学全学修了時アンケート調査

資料6-5：群馬大学卒業生・修了生就職先機関アンケート調査

資料6-6：教学IRレター vol.1

シラバスを整備する背景、必要性、意義

時代的背景

教育観の転換：自己分析・評価ができる人間の育成を行う教育が求められている。学生自身が行動し考えるようにしていく、学生主体の教育であることが必要となっている

認知的能力のみの養成を中心とした教育が限界となってきている。グローバル化、ICT、第4次産業革命の到来・進行という急激に変化してゆく時代、単なる知識はネットで獲得可能であり、一つの分野だけでは将来は立ち行かないという時代となっている。突出した能力を持つ人材の発掘が何故いま求められ、緊急の大きなテーマになっているのか。自ら主体的に学び続けられる人材の育成が我が国の将来を見据えたときに必要な課題となっている。（指示待ち人間はもはやロボット、AIに取って代わられる）

このことは既に H24 年の中教審答申でも、次のように述べられている。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

（中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」2012、p.9）

今、大学教育に要請されていること

1. 新たな3つのポリシーの策定の意味すること（大学教育の社会的認知）

教学のPDCAサイクルを回していく上での基本的理念として学位プログラム（3つのポリシー）を据え、それを充足・満足しているか否かをPDCAの基準として、教学の評価・点検を進めることを大学の使命として設定されている。

2. 継続的・自立的な内部質保証システムの構築（認証評価の最重点項目）

社会への大学の人材養成機関としての意義・価値の説明、その内容・実績の公表、また、どういう教育を行っているのか、を社会に対して説明を行うことにより、ステークホルダーたる国民からの（経済的）支援を受けることができる。（大学の存立の保証）

シラバスの意味

シラバス：カリキュラムポリシーを実行していく上での、学生との契約（学生便覧、入学時の授業科目課程表にしたがって履修が進むのと同様に）

契約書には、契約の内容（契約することにより発生する権利・義務）が明示されていないなければならない。そこで示されているべき事項は

- A. 科目選択、履修計画作成のための基本情報
- B. 授業を履修し、学習していく上での指針となる情報
- C. 成績評価、成績判定の基準についての情報
- D. 学習を進める上で必要な資料等の情報

この点に関して、中教審答申において、組織的な教育を実施していく上でシラバスが重要な位置を占めていることを以下のように指摘している。

組織的な教育の実施

体系的な教育課程に基づいて、教員間の連携と協力による組織的教育が行われること。往々にして大学の授業（授業科目）は個々の教員の責任に委ねられ、教員の専門性に引きつけた授業科目の設定が行われてきたが、学士課程教育の質的転換のためには、教員全体の主体的な参画による教育課程の体系化と並んで、授業内容やその実施に関わる教員の組織的な取組が必要である。

授業計画（シラバス）の充実

学生に事前に提示する授業計画（シラバス）は、単なる講義概要（コースカタログ）にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するように作成されること。（中央教育審議会答申同上、p.15）

シラバス整備の学生にとっての意義

1. 教育を行なう上で、教育の効果（教育の成果）の分析・判定なくしては意味が無い
教員の独りよがりにならずに、学生が適正に理解し、適切な達成目標を学生が実現して、初めていい授業となる。授業科目の達成目標、評価ポイントについて学生自身の理解が必要で、その点の教員・学生の共通理解を産み出すものとしてシラバスはある。
2. 学生が自らの達成目標を設定し、自己分析・評価を行っていくための基礎的指針
シラバスに授業の達成目標、成績評価の基準が示されていることにより、何をしなければならないのか、何が足りなかったのかという振り返りを行う上での指針となる。

シラバス整備の大学としての意義

1. 各科目の位置づけの明示、教育目標との整合性の確認
各科目の達成目標がシラバスに記載されることにより、その科目のカリキュラムマップ上での位置づけを明確にでき、CP、DPと整合性はあるかを学科・学部のカリキュラム委員会などで組織的に点検し、見直しを進めていく上での基礎情報となる。
2. 授業・カリキュラム構成の見直し、教育改革の推進のため
学生が理解して初めていい授業であることから、教育効果の判定を行い、その評価（授業評価）にもとづいて教育方法の見直しをおこなうことにより、学科・学部の教育改革を進めることができる。
3. 群馬大学の教育改革の推進—教育の内部質保証システムの構築・実質化の一ステップ
カリキュラムマップ上で繋がる授業科目間の整合性を、組織（学科）内で検討し、改善していくことを続けることにより、教育の内部質保証体制の確立という、第3期における大学の認証評価の最重点項目に対しての本学としての対応ができる。
教育に対して、教員個人任せにするのではなく、組織（学科・学部）が責任を持って状況を把握し、問題点を改善していく体制を作っていくことが、本学にとって喫緊の課題である。

シラバス入力事項に関して（改訂された3つのポリシーとの整合性が必要）

（ポートフォリオシステムの活用をサポートする、シラバスの記入ガイド）

◎基本は、学生が読んだときに、この授業で学んで行く指針・目標が明らかになり、履修計画が問題なく立てられること

- ▶ 授業の目的：学生がその科目の履修を終えた段階で「・・・ができるようになる」というイメージを持てるような記述で、具体的な学習目的の記載とする
（「・・・の原理を理解し、・・・を説明できるようになることを目的とする」）
- ▶ 授業の到達目標：授業目的に即した評語（観点）についての到達目標（達成、向上）の記述（学生が主語：「***することができる」という記述）
- ▶ DP との関連：成績評価に関係する評語（観点）のそれぞれが、主として DP のどの項目に関係しているかの対応関係の表示（これにより、学生の自己評価、学習計画の策定が促される）
- ▶ 授業概要：授業で学ぶ内容の説明、関連情報（教員が何をするのかだけではなく、関連して学生が何をするのかも）
- ▶ 授業の形式：講義、グループ活動、フィールドワーク、試験、実験など（特に、アクティブラーニングに関係すること、学生の授業への参加の形についても記入）
- ▶ 授業スケジュール：15回分の授業計画の詳細、期末試験や中間試験のことなど（特に、学外学習等を行う場合は記載が必須）（保健学研究科のシラバスが参考になる）
- ▶ 授業時間外学習情報：予習・復習など自己学習についての指示(学則)（予習・復習が単位取得で必須のものであることの周知）(時間外学習時間の増加を図ること)
- ▶ 成績評価基準（授業評価方法）：（評語（観点）ごとに）どのような方法・基準で成績評価を行うのか（「・・・ができる」の意味の明示（ループリック等の使用が望ましい）、この基準は学生が達成度を自己評価し、自己学習を進める上での重要な指針）（出席を点数として入れるのは不可、「授業への積極的参加」として質的評価にする）
-
- ▶ 教科書・参考書に関する補足情報：Moodle 等による毎回の講義で使用する講義資料、プリント、演習課題等の情報。
- ▶ コース管理システム (Moodle) へのリンク：(Moodle の活用により、授業評価・アンケート・学生間の意見交換・質問等が可能なので、全学的にも一層の活用が望まれる)
-

注：学生が主語の形の表現になるので、記述の仕方として、「・・・ことができる」の前の動詞としては、以下のようなものがある

行う、列記する、列挙する、述べる、説明する、分類する、比較する、例を挙げる、関係づける、解釈する、予測する、選択する、推論する、公式化する、一般化する、使用する、応用する、適用する、演繹する、批判する、評価する、寄与する、協調する、示す、見せる、表現する、始める、系統立てる、参加する、反応する、 応える、配慮する、感ずる、始める、模倣する、熟練する、実施する、創造する、操作する、動かす、調べる、準備する、測定する、・・・など

シラバスの具体例 教養基盤科目「学びのリテラシー（１）」の場合

授業の目的

この授業では日本語による論理的な表現方法について学び、大学で学習するために必要な基本的な知識と技術を身につける。特に、「レポート」を書くために必要な「論理的思考能力」と文章を通じた「コミュニケーション能力」を高める方法を理解し、それを実践できるようになることを目的とする。

授業の到達目標

文章の骨組みを整えて、語順にも工夫したエッセイを書くことができる。
論理的思考のために必要な、ものの考え方の手続きを利用できる。
理工系におけるレポートの適切な構成について説明できる。
状況に応じて正しい敬語を使い分ける手紙や電子メールを書くことができる。

ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A 諸科学についての基礎的知識と理解 ○
- B 論理的・創造的思考力 ◎
- C コミュニケーション能力 ◎
- D 社会的倫理観・国際性 ○

（◎：特に重視する、○：重視する、△：評価対象、－：評価対象としない）

授業概要

エッセイを書くための基本的な日本語の表現技法を学ぶ。そのうえで、作文や小論文とは異なる理工系のアカデミック・レポートを作成するために必要な思考方法、文章構成を身につける。特に、実験レポートの書き方について習得する。最後に、大学の教職員や企業の方などとのコミュニケーションを行う際に必要となる敬語を使えるようにする。

授業の形式

演習と講義である。演習では 3 部屋（各部屋 45 名程度）に分かれて、実際に文章を作成するとともに、学生どうして相互に読みあわせを行う。

授業スケジュール

- 1：エッセイとレポートの違い（講義）
- 2：文節の役割、文の骨組み（講義）
- 3：語順の工夫（講義）
- 4：文章の要約・吟味・提案 1（演習）
- 5：文章の要約・吟味・提案 2（演習）
- 6：論理的思考 1 「問題」「結論」「理由」「事実」（講義）
- 7：論理的思考 2 「問題の連鎖」（演習）
- 8：理工系におけるレポートの構成（講義）
- 9：図表作成の技法（講義）
- 10：データ処理の技法（講義）
- 11：模擬実験レポート作成 1（演習）
- 12：模擬実験レポート作成 2（演習）

- 13：敬語の基礎（講義）
- 14：敬語を使った手紙と電子メール（演習）
- 15：授業のふりかえり（演習）

授業時間外学習情報

毎回、授業時間外学習課題が課される（授業時間 90 分に対して 180 分の予復習が必要である）。Moodle で次回の授業内容の予習を行うとともに、復習に相当する課題を翌週の授業時間までに提出すること。

成績評価基準

エッセイ（20 点）、論理的思考のための手続き（25 点）、レポートの適切な構成の説明（30 点）、手紙・電子メールを書く（25 点）

それぞれの対象に関するルーブリックを授業中に配布する。評価はルーブリックに基づいて行われる。

例）エッセイについての簡易ルーブリック

文章の構造（10 点）：

◎ 語順についての基本ルールが完全に守られている（10 点）> 語順についての基本ルールに一部誤りがある（5 点）> 語順についての基本ルールが守られていない（0 点）

◎ 意味があいまいな文の有無（10 点）：

あいまい文がまったくない（10 点）> あいまい文が一部存在する（5 点）> あいまい文が多く読み手の誤読を招く（0 点）

教科書・参考書に関する補足情報：

Moodle から毎回の講義で使用する講義資料、プリント、演習課題等を見ることが出来る。

コース管理システム（Moodle）へのリンク：

<https://mdl2.media.gunma-u.ac.jp/> * * *

教務システム内のポートフォリオシステムの活用について

<位置付け――何故、今導入が必要か>

第3期の中心的課題：教育の内部質保証の実質化

第3期中期計画 「教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置」

【17】教務システムをさらに拡充し、学生の各科目での成績、GPA、授業出席状況などの修学状況についての情報を統合化し、教員が共有して学生指導に活用できる体制を整備する。

【18】教員評価、FD活動、学生による授業評価及び在学生・卒業生の意見調査、学生との懇談会を定期的実施し、教育方法の改善、教育環境の整備に反映させる。なお、教員の学生指導や教員と学生の意見交換にICTを積極的に活用する。また、教育内容・方法を改善するための学外者の意見を聴取する体制を導入する。

平成28年度計画

【17-1】教務システム等を活用し、学生情報の統合化により、積極的な学生指導を行う。

【18-1】FD活動、学生による授業評価、学生からの意見調査などを行うことを通して、教育方法を改善する。

【18-4】教員の学生指導や教員と学生との意見交換にコース管理システム（Moodle）等を利用する。

平成29年度計画

【17-1】教務システム等を活用し、学生情報の統合化により、積極的な学生指導を行う。また、ポートフォリオシステムの運用方法等を見直し、自学自習の促進及び適切な学生指導につなげる。

【18-1】FD活動、学生による授業評価、学生からの意見調査などを行うことを通して、教育方法を改善する。FD活動の強化を継続し、学生との定期的な懇談会などを通じて教員と学生の意見交換を活発化する。定期的な卒業生の意見調査の実施体制を構築する。

【18-4】オンライン学習管理システムの充実を図り、学生指導、教員と学生との意見交換、情報倫理eラーニング等、各種教職員向けの講習・研修等にICTの積極的な活用を促す。

<導入目的>

振り返りを通じた学生自身の学修目標の自覚と自学自習の促進を基に、さらなる学生指導体制の充実を進めること

<教育効果>

教務システムのICT環境下で管理されたシステムのため、学生個人個人の受講科目全体のデータの統合ができる。DPと関連付けられたシラバスの整備を進めることにより、学期・学年単位で履修状況、その達成度が可視化できる。それにより、以下の効果が期待できる。

- ① 学修過程、学修成果を記録し、客観的に示すことにより自らの課題を自覚
- ② 学修達成状況についての自己点検・自己評価から自学自習の促進の動機付け
- ③ 達成度自己評価による学修意欲の喚起と課題の発見
- ④ 進捗状況の把握、適時のコメントを通じた指導教員との意思疎通の促進

<紙ベースのポートフォリオではなぜだめなのか>

- ◎他のデータとの統合、編集が困難
- ◎音声や写真、動画への対応ができない
- ◎保存・保管時に散逸しやすく、欲しいポートフォリオを探すのが困難

<運用について>

- ① ポートフォリオの教育効果の成否は、指導教員を中心とした教員の理解と学生へのアプローチの努力に依存（指導教員からの適時、適切なコメント）
- ② 各科目のシラバスには、その科目と学科・専攻等のDPとの関連付けを示す評価ルーブリックを提示し、達成度の自己評価の指針とする（具体例を何点か提示）
- ③ Moodleとの併用（eラーニングの展開、授業アンケートや学生の疑問への対応）による効果アップ
Moodleは各科目について、講義資料の配布、レポート提出、小テストの実施、グループディスカッションの実施、アンケートの実施ができ、個々の授業を通じたICT環境での学生指導が可能

<セキュリティについて>

ポートフォリオシステムは教務システムに組み込まれているので、教務システムと同等のセキュリティレベルを持っている。

ポートフォリオの意義（教職員向け）

2017年4月14日

二宮 祐（大学教育・学生支援機構 教育改革推進室）

○ 教育評価とは

教育において評価は重要な営みです。一般的には、評価とは学期末に行う成績評価を意味するかもしれませんが。しかし、学生の成長を促すためにはその他の評価も必要になります（田中 2008）。

教員による学生に対する評価として、第1に「診断的評価」が挙げられます。これは入学時、年度開始時、授業開始時において、学生の能力、経験、期待等を把握するために行う評価のことです。授業を本格的に始める前に学生のことを知ることで、授業内容、方法、計画等を見直すことができます。第2に「形成的評価」が挙げられます。これは授業過程において、学生に対して成長の手助けとなるようなフィードバックを行うことです。何ができるようになっていて、何ができていないのかを明確にして学生に伝えます。また、そのことを通じて教員自らが反省して、授業を途中で改善することができます。ただし、これはあくまでも途中の評価なので、成績評価に使うことはできません。第3に「総括的評価」です。これは最終的な成績評価のことです。学生にとっては目標をどれだけ達成できたのかの目安であり、教員にとっては「形成的評価」と同様に反省のための資料となります。

そして、重要な評価のもう一つは学生による「自己評価」です。自分の学習についてあたかも第三者のように間主観的に評価して、それにより次の学習を調整することが可能になります。「メタ認知」や「(セルフ) モニタリング」とも呼ばれることもあります。自分で何ができるようになっていて、何ができていないのかを把握することが大事だと言われています。ポートフォリオはこの「自己評価」のために用いられるものであり、教職員がフィードバックする場合には「形成的評価」にも役立てることができます。

○ 評価についての考え方

こうした評価についての考え方は、「心理測定的パラダイム」と「オルタナティブ・アセスメントのパラダイム」で整理されるといいます（松下 2012）。表1はそれをまとめた

表1 評価の2つのパラダイム（出所：松下 2012）

	心理測定的パラダイム	オルタナティブ・アセスメントのパラダイム
学問的基盤	心理測定学	構成主義、状況論、解釈学など
評価目的	アカウンタビリティ、質保証	教育改善・指導、学生の成長
評価対象	集団	個人
評価機能	総括的評価	形成的評価
評価項目	分割可能性	複合性
評価場面	脱文脈性、統制された条件	文脈性、シミュレーション、真正の文脈
評価基準	客観性	間主観性
評価データ	量的データ	質的データ
評価主体	評価専門家、政策担当者	実践者自身
評価方法	標準テスト、学生調査など	真正の評価、ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価など

ものです。学期末における筆記試験、レポート課題や学生を対象としたアンケートなどは「心理測定学的パラダイム」に基づくものです。教員や評価の専門家が量的データを客観的に評価するという特徴があります。それらを補うものとして、「オルターナティブ・アセスメントのパラダイム」に基づく評価の方法があります。このパラダイムは「標準テストを代替したり、補完したりするようにデザインされたさまざまな評価方法」の総称です。学生が質的なデータを間主観的に「自己評価」するものです。従来の評価からすれば曖昧で心もとないように思えるかもしれませんが、ともすればできなくても問題ないと諦めさせて次の行動に結び付かない他者からの「総括的評価」の弱点を穴埋めすることにつながります。

○ ポートフォリオとは

ポートフォリオのものと意味は「紙ばさみ」のことです。芸術家や記者が自らを売るときに使うファイルやスクラップ帳などを指しています。たとえば、画家であれば、作品、個展の案内状、新聞や雑誌に掲載された批評などを綴じこんでおきます。それを見れば、その画家のことがよくわかるのです。日本においては、初等中等学校に数値化することの難しい、多面的な評価を必要とする「総合的な学習の時間」が2000年から段階的に導入されたことを契機として、ポートフォリオが普及するようになりました（西岡ほか編 2015）。教育機関におけるポートフォリオには、教員が教育実践を記録するティーチング・ポートフォリオ、それに研究業績や社会貢献を加えたアカデミック・ポートフォリオやファカルティ・ポートフォリオ、そして、学生が学習を記録するラーニング・ポートフォリオ等があります。すべて教員、学生の「義務」としてではなく、様々な目標に対する達成を根拠に基づいて他者に説明したうえで、正当な評価を受けるための「権利」として利用されることが想定されています。ここでは、ラーニング・ポートフォリオに焦点を絞ってその概要を紹介します。

2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（通称学士課程答申）において、「学生が、自らの学習成果の達成状況について整理・点検するとともに、これを大学が活用し、多面的に評価する仕組み（いわゆる学習ポートフォリオ）」の導入が提案されました。この答申は「(教員が) 何を教えるか」よりも「(学生が) 何をできるようになるか」

に力点を置く国際的な大学教育の潮流を指摘したうえで、学習成果の明確化を求めています。学生が多様な活動を通じて得た成果を評価するために、学修履歴等の記録と自己管理のためのシステムを開発する

表2 教授パラダイムと学習パラダイムの対比（一部抜粋）（出所：溝上 2014）

	教授パラダイム	学習パラダイム
役割と目的	授業を提供すること	学習を産み出すこと
	教員から学生へ知識を伝えること	学生の発見や知識構成を引き出すこと
	授業科目とプログラムを提供すること	力強い学習環境を創り出すこと
	授業の質を改善すること	学習の質を改善すること
学習理論	知識の固まりが教員によって分割されて伝達される	知識は構成され、創出され、「獲得される」もの
	学習は蓄積され直線的なもの	学習は入れ子式で、相互作用的な枠組みを持つもの
	知識メタファーの貯蔵庫に合致	自転車の乗り方を学習するメタファーに合致
	学習は教員中心でコントロールされるもの	学習は学生中心でコントロールされるもの
	教室と学習は競争的で個人主義的である	学習環境と学習は協同的で、協調的で、支援的である

ことが重要であると指摘しています。表2は20世紀後半以降の「教えるから学ぶへ（from teaching to learning）」の教育に関するパラダイム転換をまとめたものです。学生の立場になると、学習は教室内だけで行われているわけではなく、知識は着実に積み重ねられるというわけでもないということへの着目が促されています。

ポートフォリオが必要であるという考え方は1980年代後半の米国における「真正の評価」（Authentic Assessment）論に基づくものであるといわれます（土持 2009）。当時の米国では教育機関は説明責任を果たすべきであるとされ、そのために心理測定学に基づく「標準テスト」が開発、多用されました。しかしながら、そのテストでは多様であるはずの能力のうちの一部しか評価することができず、とりわけ、卒業後に生活、労働するための能力を対象とすることはできていないという批判が生じました。そこで、教員によるティーチング・ポートフォリオ、アカデミック・ポートフォリオの導入と合わせて、学生によるラーニング・ポートフォリオが必要であるといわれるようになりました。筆記試験、レポート課題によって身に付けた知識が教員から評価されるのと同時に、ラーニング・ポートフォリオによって、なぜ、何を、どのように学んで、どのように活用するのか、そして、どのように成長したのかと、学生が「自己評価」を行います。大人が市民生活や職業生活の中で知識や技術を活用して生きていくときに、必ずしも他者から明確な評価を受けるわけではなく、「自己評価」を行うことで日々の活動を調整するのと同じなのです。

ポートフォリオの研究を進めているズビサレタによれば、学習がもっとも活性化されるのは、reflection（省察）、documentation（証拠になる書類）、collaboration（協力）の3つが揃うときであるといえます（Zubizarreta 2009）。とりわけ、reflectionが重要です。学習プロセスを省みることで、能動的学習が促されます。教育評価の研究者であるサスキーも同様に、reflectionを重視します。reflectionはより自分に適した学習の方法やその管理について深く考える「メタ認知」と、これまでに学習したことをまとめて全体像を掴む「統合」とを促進するといえます（Suskie 2009）。ポートフォリオは学生が主体的に学習を進めるうえで有効とされているのです。

○ ポートフォリオの導入事例

各大学でポートフォリオの導入が進んでいます。ここでは、2つの大学の事例を紹介します。

金沢工業大学では「KITポートフォリオシステム」というシステムがあります。学生が自ら目標を設定して、活動したことやその成果をポートフォリオに記録します。そして、目標への達成度を自己評価して、次の活動計画を作成することになっています。このシステムは「修学ポートフォリオ」「自己評価レポートポートフォリオ」「キャリアポートフォリオ」「プロジェクトデザインポートフォリオ」「達成度評価ポートフォリオ」から構成されています。特徴的なことは、全学必修科目である「修学基礎」という授業で「修学ポートフォリオ」に取り組む点です。「今週の優先順位と達成度」「出欠席遅刻の状況：科目名とその理由」

「学習の状況：科目名、資格名、時間数」「課外活動：教育施設、クラブ活動、アルバイト、時間数」「健康管理：朝昼夜の食事摂取、睡眠時間、積極的な運動時間」「1週間で満足したこと、努力したこと、反省点、日常生活で困ったこと」を毎週記録して、修学アドバイザー（クラス担任）に提出します。修学アドバイザーはコメントをつけて返却します。学生が目標の達成度を確認して、能動的な学習スタイル・生活スタイルを身につけることが期待されています。「形成的評価」と「自己評価」が行われています。

横浜国立大学では「YNU 学生ポートフォリオシステム：学びの通信簿」を導入しています²⁾。このシステムは群馬大学で導入されるものと同じものです。卒業時点で有すべき資質・能力である到達目標（YNU イニシアティブ）と学習成果の関係を可視化して、「学位」の質保証を図る仕組みとされています。「学習成果の可視化」に基づいて到達度を把握して、半期ごとに自身の「振り返りシート」を作成することで省察を行い、次学期に向けて取り組むべき課題を見つけるなど自ら学修計画を立てて、自律的な学修を進めることが期待されています。学生はポートフォリオを利用することで、大学生活で得た学習などの経験やその時々思い、成果を得るまでのプロセス等の蓄積、学習状況等を振り返ることにより、学習を深化させ、将来のキャリアデザインに活かすことが可能になるとされています。「自己評価」に焦点を絞った取り組みです。

○ ポートフォリオ導入の背景—内部質保証の必要性

ポートフォリオは大学教育の質保証に関係しています。大学進学率の上昇に伴って多様な学生を迎えるようになり、各大学においてそれに対応する教育が試行錯誤を繰り返して行われるようになりつつあります。また、グローバル化の影響により、日本の大学がいかなる教育を行っているのかを海外に向けて示す必要も生じてきています。同時に、財政当局が大学へ税を使って交付金、補助金を投入することに対して厳しい姿勢を取るようになり、大学が何をしているのかについての説明を求めようになっています。そのうえで、大学の質保証には次のような3つの目的があるとされます（早田 2015）。第1に、「大学」として必要とされる基準や要件を充足しているかどうかを判断し若しくは判定すること、第2に、上記のような基準や充足状況の確認の上で、大学の特質や要改善点を提示することを通じ、それぞれの大学の充実・発展を側面的に支援すること、第3に、上記2つの事項を社会に公表することによって、大学の社会への説明責任を全うさせ（＝アカウンタビリティの履行）、社会一般の人びとが、各大学の状況を多面的に把握できるようにすることです。

質保証には外部質保証と内部質保証があります。前者は認証評価機関等による第三者機関による評価により質の担保を図るものです。後者は大学自身の努力によって教育の営みについての保証の体制を構築するというものです。大学評価・学位授与機構（現在の大学改革支援・学位授与機構）が行う大学機関別認証評価では、「基準 8：教育の内部質保証システム」として大学が内部質保証システムを整備することを求めています。そのうえで、内部質保証システムを構成する要素として、以下の(1)～(8)を挙げたガイドラインが作成されて

います。(1)「内部質保証に関する全学の方針・責任体制」内部質保証に関する全学の方針を定め、責任体制を明確にしている。この全学的な方針のもとに、以下の(2)-(8)に示すそれぞれの質保証活動や個々の体制構築が行われる。(2)「教育プログラムの承認・定期的点検・改善」教育プログラムの新設の承認、定期的な点検・評価、改善を継続的に実施する体制や手続きを有する。特に、学生の学習成果を確保するという観点から、教育の取り組みの質と教育内容や授与する学位の水準について点検・評価を行う。(3)「教職員の点検・能力開発」教職員が適切な能力を有していることを確認するための点検・評価や、教職員の育成・能力向上のための方策を、継続的に実施する体制や手続きを有する。(4)「学習環境や学生支援の点検・改善」学習環境や学習支援・生活支援などの施策に関する点検・評価を行い、改善を継続的に実施する体制や手続きを有する。(5)「大学や部局の教育に関する目的・目標に対する点検・改善」大学や部局といった組織全体の教育に関する目的や中長期の目標・計画に対して、活動状況や進捗・達成状況の把握を行い、改善を継続的に実施する体制や手続きを有する。(6)「質保証への学生や外部者の関与」上記の各種の内部質保証において、学生や外部関係者が参加する、あるいはそれらの者の意見を聴取するような体制や手続きを有する。(7)「教育に関する情報の収集・分析」教育の状況について、活動の実態を示すデータや資料を適切に収集、蓄積し、分析を行い、その結果を利用するための体制や手続きを有する。(8)「教育情報等の公表」教育の質保証や消費者保護の観点から、入学志願者、在学生、保護者等に対して、教育プログラム等に関する正確な情報を定期的に公表する体制や手続きを有する。

注

1) <http://www.kanazawa-it.ac.jp/kyoiku/portfolio.html>

2) <http://www.ynu.ac.jp/career/ynu/portfolio.html>

参考文献

西岡加名恵 (2015) 『新しい教育評価入門一人を育てる評価のために』 有斐閣。

田中耕治 (2008) 『教育評価』 岩波書店。

土持ゲーリー法一 (2009) 『ラーニング・ポートフォリオ』 東信堂。

早田幸政 (2015) 『大学の質保証とは何か』 エイデル研究所

松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて」『京都大学高等教育研究』 18。

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂。

Suskie, Linda (2009) *Assessing Student Learning: A Common Sense Guide, second edition*, San Francisco: Jossey-Bass.

Zubizarreta, John (2009) *The Learning Portfolio: Reflective Practice for Improving Student Learning, second edition*, San Francisco: Jossey-Bass.

図表 大学教育の質保証と評価のあり方について（藤田英典作成図表（文部科学省平成23年度先導的大学改革推進委託事業「大学における教育研究活動の評価に関する調査研究」）を二宮一部修正

		<p>AP (アドミッシヨンポリシー) → GP (カリキュラムポリシー) / DP (ディプロマポリシー) → RP (グレイディングポリシー)</p>		<p>大学教育の質保証・向上と評価への関心拡大の背景 ①大学教育のユニバーサル化と知識基盤社会の進展 等 ②規制緩和と事後評価・質保証・説明責任を問う時代 等</p>	
個人	インプット	<p>AP (アドミッシヨンポリシー)</p> <p>入学者の諸特性 学力・能力・関心・意欲・態度、各種経験、人柄、大学への期待 等</p>	プロセス	<p>アウトプット (直接的な教育成果・学修成果)</p> <p>学修成果 (専門的知識・技能・教養 等) > 大学設置基準第19条「専門の学芸」の教授と「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性」の形成 > 出席・参加実績、交友関係の構築 等 > 卒業成績 (成績証明書) > 学位 (教育資格)、各種資格</p>	アウトカム (実際に発揮される資質・能力)
	大学	<p>教育資源・教育環境 > 学部・学科等の編成 > 教員 等 > 施設・設備・教具 等</p> <p>教育理念・目的 教育プログラム > カリキュラム > 授業科目・授業内容 > 教授法・指算法と実践評価 > ガイダンス・カウンセリング 等</p> <p>大学の社会的責任 Social Responsibility > 自己点検・評価と教育プログラムの質の保証・向上 > 市場的な準契約責任および制度的・社会的責任の適切な遂行と社会貢献 > ストックホルダー (教職員・学生・保護者・社会 等) への適切な対応 > 説明責任の遂行・充足と情報公開</p>	<p>学生 (顧客) に対する責任 [市場的な責任] ① 契約責任 ② 教育的・社会的機能と責任 [知識の教授とマネジメント]</p> <p>卒業率・就職率 > 卒業率 > 学位・学校歴の授与</p> <p>学生 (顧客) に対する責任 [市場的な責任] ① 契約責任 ② 教育的・社会的機能と責任 [知識の教授とマネジメント]</p> <p>制度的・社会的機能と責任 (資格・人員のマネジメント)</p> <p>自己点検・評価 (自己点検評価) 国立大学法人評価</p>	<p>① ユニバーサル・アクセス段階の大学教育 > 入学・学生 等の多様性 (学力・進路 等) > 人材育成: 一般職業人/専門技術者/研究者 > 市民性・社会性・倫理・教養の形成 > 大学の自律性 > 入学者選抜権、学位授与権、教授権・評価権、カリキュラム編成権 等</p> <p>② 大学の社会的・市場的評価 > 人試難易度・入試倍率 等 > 学部・教育課程・教授陣 等 > 学生の資質・能力と就職機会</p> <p>③ legitimacy of charter の社会的付与 > 学士力やジェネリック・スキルといったアウトカムの測定評価を含む標準スキームによるアウトカムの評価は難しい > GP/RPや卒業率・就職率等の適切性と自己点検評価・質の保証・向上のスキームとその作動の評価を中心とするのが望ましい</p>	
		<p>要 ① 無益な努力・資源消費の回避 ② 質向上に向けた実質的な取り組みの優先</p>			

平成30年4月3日

学生の皆さん

副学長・理事（教育・企画担当）

窪田 健二

群馬大学教務システム 学生ポートフォリオについて

1. ポートフォリオとは？

これから皆さんが使うポートフォリオとは、皆さんの学修過程での各種の成果（学修計画、収集した資料、授業や実験・実習のレポート、課外活動、TOEIC 得点、単位取得状況など）を収集し整理したもののことです。学生生活の中で考えたことや感じたこと、経験したことや学修したことを、記録(証拠)として残し、人に見せられるようにするための仕組みです。

ポートフォリオはファイルやノートでもいいのですが、後日行う振り返り（これがポートフォリオを作ることの最大の目的です）や助言をもらうためには、紙のものよりは PC を使うほうが散逸してしまう心配も少なく編集や統合が便利なことから、これが一般的になってきています。本学のポートフォリオは教務システムの下にあり、履修した科目全体と関係付けられているので学修成果、達成状況がよく分かるようになっています。

ポートフォリオには、自分が何をしてきたのか、学生生活で何をしようとしているのか、卒業後にどうしたいのかなどについて書き留めていきます。「人に見せられるようにする」というのは、記録することで自らを客観的に見ることができるようにするためです。後日その記録を読み返し、自分の学修活動や課外活動のことなどを振り返り、次に向けての課題の発見、その計画や取組み方をデザインしていくことに使うことで、その価値を發揮します。記録に残す作業をすることで頭の中が整理され、自らの考えを客観的に評価・分析できるものにすることができます。

2. ポートフォリオをどのように作るか？(教務システムを使った学修活動記録の集積)

本学でのポートフォリオの作成には、「教務システム」の中にある「ポートフォリオシステム」を使います。「教務システム」のホームページから「ポートフォリオシステム」の登録画面に移ると、「一年を振り返って」、「成果について」、「将来に向けて」の3つの記入枠（過去、現在、未来）が出てきます。この3つに、定期的に（年度（学期）初めに）記入・記録していきます。

- ◆「一年を振り返って」では、以前の活動記録の点検を行います。同時に、当初の目標に対する活動状況について振り返りを行ない、問題点・課題などを摘出します。
- ◆「成果について」では、当初の目標に対する達成状況の自己評価を行います。
- ◆「将来に向けて」では、達成状況の自己評価を基に、指導教員からの助言なども受けて、新年度（新学期）に向けての新たな目標設定と自分なりの方針の策定を行います。

これを定期的に繰り返していき、卒業時にまとめ・総括のポートフォリオを作成することにより、大学生活全体にわたる、「目標設定—学修活動—達成状況評価—助言も受けての新たな目標設定」という学修活動のサイクルを構築していくこととなります。

3. ポートフォリオの使い方(そのメリット)

ポートフォリオを使うのは、あなた自身です。

- ◎達成状況の年度を追っての変化を見ることで、自分の成長を実感できます。
- ◎チューター、メンター、指導教員からアドバイスを受けるときの大切なデータになります。
- ◎自分の目標の達成のために必要なものが見えてきます。
- ◎進路選択の際の適性などについての自己判断の資料になります。
- ◎就職活動の際の、エントリーシートの作成や面接の際の貴重な資料になります。

振り返りの例

「2年生になるとき、1年生の学生生活を振り返ってみた。予定どおり部活は頑張れたけれども、英語力はあまり伸びなかった。2年生では英語に力を入れたい。TOEICの目標点数を決めて、来年にはそれを達成する。」

「就職活動のとき、それまでの学生生活を振り返ってみた。入学時にはやりたいことなんて決まっていなかった。2年生の冬、授業で参加したボランティアを通じて、私は人と接することが好きなことに気づいた。この経験をエントリーシートに書いてみたい。」

教務システムのポートフォリオ入力手順（学生用）

①教務システムのトップページから「ポートフォリオ」を選択します。



②「ポートフォリオ」を選択します。



③ポートフォリオメニューから「ポートフォリオ」を選択します。



④「年度」を確認し「編集」を選択します。

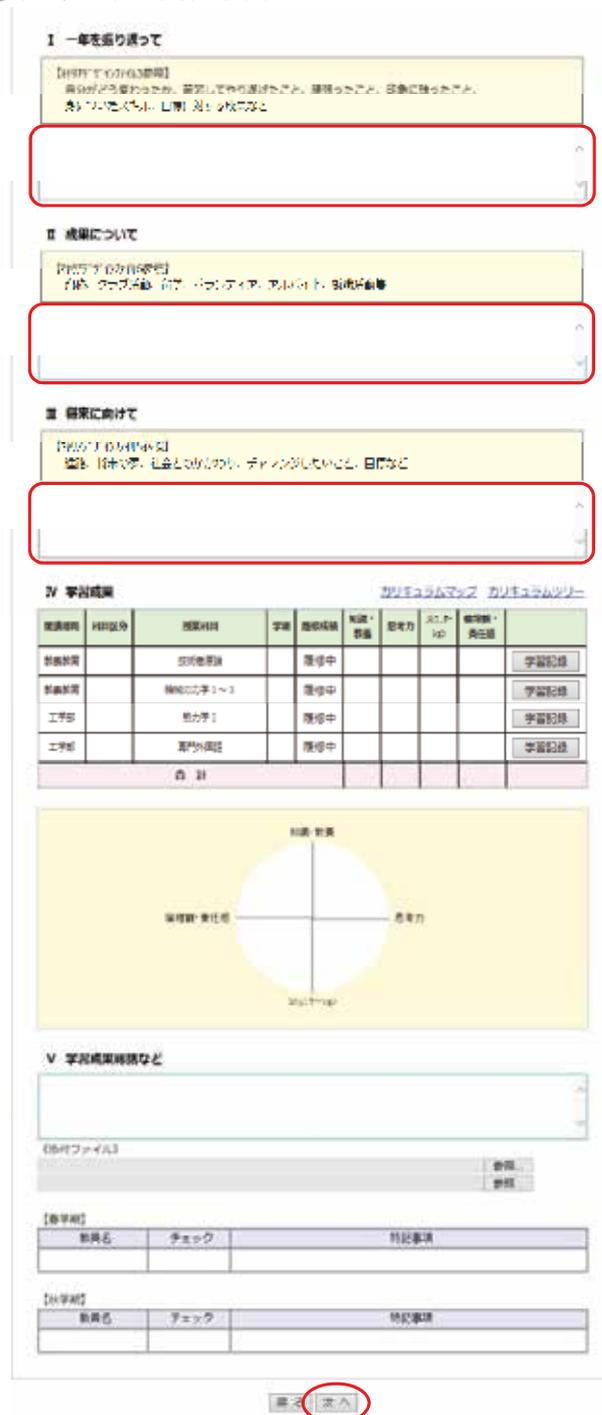


教務システムのログインページはこちらから



モバイル用ですが項目名は同じです

⑤ポートフォリオを入力します。



⑥内容を確認し、よければ「確定」を選択して終了です。
修正があれば「戻る」を選択して修正できます。



- Q 7 入学時点での群馬大学の志望順位をお選びください。
 ① 第1志望 **65.7%** ② 第2志望 **21.7%** ③ 第3志望以下 **12.6%**
- Q 8 群馬大学に入学（編入）を決めた理由について、**あてはまるものをすべて**お選びください。
 ① 興味のある学問分野があること **55.7%** ② 資格や免許が取得できること **22.0%**
 ③ 将来就きたい職業につながることを **34.0%** ④ 自分の学力と偏差値が合っていること **41.9%**
 ⑤ 就職の実績がよいこと **7.9%** ⑥ キャンパスの雰囲気が良いこと **4.4%**
 ⑦ 親元を離れられること **7.3%** ⑧ 経済的な負担が少ないこと **47.2%**
 ⑨ 親や学校の先生にすすめられたこと **23.8%** ⑩ その他 **5.9%**
- Q 9 群馬大学に入学（編入）したとき、大学の教育ポリシーについて知っていましたか。
 ① とても知っていた **3.2%** ② まあ知っていた **37.2%**
 ③ あまり知らなかった **37.2%** ④ まったく知らなかった **22.0%**
- Q 10 群馬大学に入学（編入）したとき、満足していましたか。
 ① とても満足して入学した **29.0%** ② まあ満足して入学した **55.1%**
 ③ あまり満足していないが入学した **12.0%** ④ まったく満足していないが入学した **3.2%**
- Q 11 群馬大学に入学（編入）したとき、あなたにあてはまるものをお選びください。
 ① 自分から積極的にやりたいことを探しやるほうだった **21.4%**
 ② 与えられれば興味を持ってやるほうだった **64.8%**
 ③ 与えられても、よほど興味がなければやらないほうだった **10.6%**
 ④ あてはまらない、わからない **2.9%**

【学生生活についてお伺いします】

あなたの授業や勉強の様子にあてはまるものをお選びください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまら ない	まったく あてはまら ない
Q 1 2 授業に真面目に出席した	43.1%	46.3%	9.7%	0.3%
Q 1 3 授業の予習や復習をした	5.3%	45.2%	40.8%	7.9%
Q 1 4 授業で出された宿題や課題はきちんとやった	49.9%	44.9%	4.1%	0.6%
Q 1 5 グループワークやディスカッションに、積極的に参加した	19.6%	57.2%	19.1%	3.5%
Q 1 6 計画を立てて勉強した	10.0%	41.6%	37.0%	10.9%
Q 1 7 興味をもったことについて自主的に勉強した	7.3%	22.3%	61.0%	9.1%
Q 1 8 進路や将来について積極的に考えた	2.6%	20.2%	46.6%	30.2%

あなたは次のことについてどのくらい力を入れましたか。

	とても 力を入 れた	まあ 力を入 れた	あまり 力を入 れな かった	まったく 力を入 れな かった	該当せず
Q 1 9 大学の授業	<u>17.0%</u>	<u>65.4%</u>	<u>14.7%</u>	<u>2.3%</u>	5.0%
Q 2 0 ゼミ、研究室活動	<u>34.3%</u>	<u>54.0%</u>	<u>7.6%</u>	<u>3.5%</u>	
Q 2 1 卒業論文や卒業研究	<u>38.7%</u>	<u>50.1%</u>	<u>5.6%</u>	<u>0.3%</u>	
Q 2 2 授業以外の自主的な勉強（資格試験など）	<u>17.0%</u>	<u>34.3%</u>	<u>38.1%</u>	<u>10.0%</u>	
Q 2 3 留学、海外研修・経験	<u>5.6%</u>	<u>11.1%</u>	<u>14.7%</u>	<u>68.0%</u>	
Q 2 4 サークルや部活動	<u>31.7%</u>	<u>26.1%</u>	<u>15.5%</u>	<u>25.5%</u>	
Q 2 5 アルバイト	<u>23.2%</u>	<u>45.2%</u>	<u>21.7%</u>	<u>9.7%</u>	
Q 2 6 社会活動（NPO 活動、ボランティアなど）	<u>3.5%</u>	<u>15.8%</u>	<u>26.7%</u>	<u>53.7%</u>	
Q 2 7 就職活動	<u>26.7%</u>	<u>30.8%</u>	<u>17.9%</u>	<u>23.8%</u>	
Q 2 8 インターンシップ、学外実習	<u>12.6%</u>	<u>27.6%</u>	<u>18.2%</u>	<u>41.1%</u>	

あなたは大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通して、次のような経験はどれくらい印象に残っていますか。

	とても 印象に残 っている	まあ 印象に残 っている	あまり 印象に残っ ていない	まったく 印象に残っ ていない
Q 2 9 相当の努力をして課題（単位取得や論文作成）をやりとげる厳しさがあつた	<u>30.8%</u>	<u>49.6%</u>	<u>15.2%</u>	<u>3.8%</u>
Q 3 0 実社会との接点を感じることができた	<u>13.5%</u>	<u>41.3%</u>	<u>33.4%</u>	<u>11.1%</u>
Q 3 1 学問固有の物の見方や考え方に触れられた	<u>27.0%</u>	<u>53.7%</u>	<u>15.0%</u>	<u>3.2%</u>
Q 3 2 大学の個性や特色をいかした教育を受けられた	<u>14.4%</u>	<u>54.8%</u>	<u>21.1%</u>	<u>8.8%</u>
Q 3 3 自分の適性や将来への関心を知ることができた	<u>18.8%</u>	<u>56.0%</u>	<u>19.9%</u>	<u>4.4%</u>
Q 3 4 学習について、相談にのったり支援してくれる人がいた	<u>18.8%</u>	<u>43.7%</u>	<u>26.1%</u>	<u>10.6%</u>
Q 3 5 学習以外（進路、人間関係など）について、幅広く相談にのったり支援してくれる人がいた	<u>16.4%</u>	<u>42.8%</u>	<u>25.8%</u>	<u>13.2%</u>
Q 3 6 教育に対して熱意のある教員がいた	<u>24.3%</u>	<u>51.6%</u>	<u>16.4%</u>	<u>7.0%</u>
Q 3 7 教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習を進められた	<u>19.1%</u>	<u>48.7%</u>	<u>24.0%</u>	<u>7.3%</u>
Q 3 8 学習の態度や姿勢が不適切な場合、教員から指導された	<u>12.0%</u>	<u>35.5%</u>	<u>27.6%</u>	<u>24.0%</u>
Q 3 9 学習の成果を正当に評価された	<u>19.4%</u>	<u>60.4%</u>	<u>13.5%</u>	<u>5.3%</u>
Q 4 0 貴重な友人をつくることができた	<u>52.2%</u>	<u>34.6%</u>	<u>8.2%</u>	<u>3.8%</u>

【教養教育科目（教養基盤科目・教養育成科目）についてお伺いします】

Q 4 1 教養教育科目の単位数（卒業要件）について、どのように思いますか。

- ① 多すぎる 16.7% ② ちょうどよい 79.8% ③ 少なすぎる 2.6%

Q 4 2 教養教育科目は、文献検索、資料作成、口頭発表（プレゼンテーション）の能力を身に付ける点で、十分だったと思いますか。

- ①十分である 7.6%②おおむね十分である 53.4%③やや不十分である 29.9%④不十分である 8.2%

Q 4 3 英語・外国語教養科目は、国際的なコミュニケーションの能力を身に付ける点で、十分だったと思いますか。

- ①十分である 6.5%②おおむね十分である 31.7%③やや不十分である 37.2%④不十分である 22.6%

Q 4 4 情報の科目は、情報処理能力を身に付ける点で十分だったと思いますか。

- ①十分である 7.6%②おおむね十分である 44.0%③やや不十分である 30.5%④不十分である 16.7%

【進路選択の支援などについてお伺いします】

Q 4 5 就職活動を行う際に、「キャリアサポート室」や「就職ガイダンス」などの大学の就職支援は役立ちましたか。

- ① とても役立つ 11.4% ② 少し役立つ 34.9%
③ あまり役立たなかった 25.5% ④ ほとんど役立たなかった 26.7%

Q 4 6 「キャリアサポート室」を利用しましたか。

- ① よく利用した 4.1% ② ときどき利用した 17.6%
③ ほとんど利用しなかった 18.5% ④ まったく利用しなかった 58.7%

Q 4 7 大学が行った「就職ガイダンス」に参加しましたか。

- ① 何回も参加した 12.6% ②数回参加した 57.2% ③ 1回も参加しなかった 29.0%

Q 4 8 大学院への進学について、情報提供はしっかり行われていたと思いますか。

- ①しっかり行われていた 12.6% ②だいたい行われていた 36.4%
③あまり行われていなかった 22.3% ④ほとんど行われていなかった 9.7% ⑤わからない 17.9%

Q 4 9 インターンシップ（学外実習を含む）に行ってみて、どのように感じていますか。

- ①インターンシップ（学外実習を含む）に行って、大いに充実した時間を過ごせた 15.2%
②インターンシップ（学外実習を含む）に行って、まあ充実した時間を過ごせた 31.1%
③インターンシップ（学外実習を含む）に行ったが、あまり充実した時間は過ごせなかった 2.9%
④インターンシップ（学外実習を含む）に行ったが、まったく充実した時間は過ごせなかった 0.9%
⑤インターンシップ（学外実習を含む）に行っていない 48.1%

【施設や設備についてお伺いします】

Q 5 0 教室や演習室などの教育施設に満足しましたか。

①満足している 20.2%②やや満足している 54.3%③やや不満である 19.1%④不満である 5.3%

Q 5 1 授業以外の自主的な活動をする上で、施設に満足しましたか。

①満足している 19.9%②やや満足している 49.6%③やや不満である 20.5%④不満である 8.5%

【最後に、学習の成果についてお伺いします】

あなたは群馬大学での学習によって次の目標をどれくらい達成したと思いますか。

	とても そう思 う	まあそ う思 う	あまり そう思 わない	まった くそう 思わな い
Q 5 2 専門的学識・技能を修得した	<u>20.8%</u>	<u>59.5%</u>	<u>14.4%</u>	<u>3.5%</u>
Q 5 3 専門的学識・技能を現実の諸課題に対して活用ができるようになった	<u>16.7%</u>	<u>54.8%</u>	<u>21.1%</u>	<u>5.6%</u>
Q 5 4 人間社会、歴史・文化、自然等についての幅広い教養を身に付けた	<u>13.2%</u>	<u>49.6%</u>	<u>27.9%</u>	<u>8.2%</u>
Q 5 5 幅広い教養、学際的な理解に基づいて、様々な問題に対して多面的・総合的な判断ができるようになった	<u>13.2%</u>	<u>56.3%</u>	<u>24.3%</u>	<u>4.7%</u>
Q 5 6 論理的思考力を身に付けた	<u>17.9%</u>	<u>60.7%</u>	<u>16.4%</u>	<u>3.8%</u>
Q 5 7 コミュニケーション能力を高めた	<u>18.8%</u>	<u>54.5%</u>	<u>19.1%</u>	<u>6.2%</u>
Q 5 8 社会で生起する問題に対し主体的に取り組む意欲を持つようになった	<u>14.4%</u>	<u>52.8%</u>	<u>26.1%</u>	<u>5.3%</u>
Q 5 9 自然との共生を基盤とした豊かな人間性と広い視野及び社会的倫理観を身に付けた	<u>10.3%</u>	<u>53.4%</u>	<u>27.6%</u>	<u>7.0%</u>
Q 6 0 社会から信頼され国内外で活躍することができるようになった	<u>8.2%</u>	<u>35.2%</u>	<u>34.0%</u>	<u>21.4%</u>

Q 6 1 群馬大学のカリキュラムを全体としてどう評価しますか。

①十分である 17.6%②おおむね十分である 64.5%③やや不十分である 14.1%④不十分である 2.9%

Q 7 群馬大学大学院に入学したとき、大学院の教育ポリシーについて知っていましたか。

- ① とても知っていた 6.5% ② まあ知っていた 35.0%
 ③ あまり知らなかった 41.5% ④ まったく知らなかった 16.2%

Q 8 群馬大学大学院への入学に、満足しましたか。

- ① とても満足して入学した 30.4% ② まあ満足して入学した 60.4%
 ③ あまり満足していないが入学した 6.9% ④ まったく満足していないが入学した 1.5%

【研究についてお伺いします】

あなたは群馬大学大学院での研究において、次のような経験はどれくらい印象に残っていますか。

	とても印象に残っている	まあ印象に残っている	あまり印象に残っていない	まったく印象に残っていない
Q 9 相当の努力をして課題（単位取得や論文作成）をやりとげる厳しさがあつた	<u>55.8%</u>	<u>36.2%</u>	<u>6.9%</u>	<u>0.8%</u>
Q 1 0 実社会との接点を感じることができた	<u>19.2%</u>	<u>45.0%</u>	<u>27.3%</u>	<u>8.1%</u>
Q 1 1 学問固有の物の見方や考え方に触れることができた	<u>48.8%</u>	<u>42.3%</u>	<u>5.4%</u>	<u>2.3%</u>
Q 1 2 大学院の個性や特色をいかした教育を受けることができた	<u>30.8%</u>	<u>45.8%</u>	<u>17.3%</u>	<u>5.4%</u>
Q 1 3 自分の適性或将来への関心を知ることができた	<u>38.1%</u>	<u>46.2%</u>	<u>10.8%</u>	<u>3.5%</u>
Q 1 4 研究について、相談にのったり支援してくれる人がいた	<u>56.9%</u>	<u>32.7%</u>	<u>6.5%</u>	<u>3.1%</u>
Q 1 5 研究以外（進路、人間関係など）について、幅広く相談にのったり支援してくれる人がいた	<u>31.9%</u>	<u>43.5%</u>	<u>16.9%</u>	<u>6.5%</u>
Q 1 6 教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて研究を進められた	<u>53.8%</u>	<u>31.9%</u>	<u>9.2%</u>	<u>4.2%</u>
Q 1 7 研究の態度や姿勢が不適切な場合、教員から指導を受けた	<u>30.8%</u>	<u>41.5%</u>	<u>20.0%</u>	<u>7.3%</u>
Q 1 8 研究の成果を正当に評価された	<u>39.2%</u>	<u>50.4%</u>	<u>5.4%</u>	<u>3.8%</u>

【研究環境や進路選択の支援などについてお伺いします】

あなたは群馬大学大学院での研究生活に関して、次の項目についてどの程度満足していますか。

	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	まったく満足していない
Q 1 9 研究テーマ選択の自由度	<u>40.4%</u>	<u>43.5%</u>	<u>12.7%</u>	<u>3.1%</u>
Q 2 0 研究テーマに対する指導	<u>45.8%</u>	<u>42.3%</u>	<u>8.1%</u>	<u>3.5%</u>

Q 2 1 指導教員とのコミュニケーション	<u>49.6%</u>	<u>37.7%</u>	<u>7.7%</u>	<u>4.6%</u>
Q 2 2 図書館	<u>20.8%</u>	<u>57.3%</u>	<u>16.5%</u>	<u>3.8%</u>
Q 2 3 研究施設・設備・機器等	<u>28.5%</u>	<u>50.0%</u>	<u>17.3%</u>	<u>3.5%</u>
Q 2 4 就職支援	<u>18.1%</u>	<u>48.1%</u>	<u>22.7%</u>	<u>10.0%</u>

【最後に、研究の成果についてお伺いします】

あなたは群馬大学大学院での研究によって、次の目標をどれくらい達成できたと思いますか。

	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
Q 2 5 幅広く豊かな学識を身に付けた	<u>30.4%</u>	<u>52.3%</u>	<u>13.5%</u>	<u>3.1%</u>
Q 2 6 専門分野において自立して研究活動 を实践できる能力を身に付けた	<u>30.0%</u>	<u>53.8%</u>	<u>11.5%</u>	<u>3.5%</u>
Q 2 7 高度な専門性または国際性を必要と する職業を担う能力を身に付けた	<u>21.9%</u>	<u>43.8%</u>	<u>29.2%</u>	<u>4.2%</u>
Q 2 8 研究者・技術者・高度専門職業人と しての倫理観を身に付けた	<u>32.7%</u>	<u>54.2%</u>	<u>9.2%</u>	<u>2.7%</u>

Q 2 9 群馬大学大学院のカリキュラムを全体としてどのように評価しますか。

①十分である 25.4%②おおむね十分である 59.6%③やや不十分である 10.8%④不十分である 3.5%

群馬大学卒業生・修了生就職先機関アンケート調査

—ご協力のお願い—

本アンケート調査は群馬大学の今後における教育の充実のために、学部卒業生・大学院修了生を雇用なさっている企業、団体、自治体、学校、病院等における新卒採用ご担当の皆さまを対象としてご意見をお伺いするものです。皆さまの声を教育に反映させたいと考えております。

皆さまから頂いた回答は統計的に処理し、個別の情報が公表されることはありません。皆さまが群馬大学出身者に対して感じていることを、どうか率直にお聞かせください。

2018年12月1日

群馬大学大学教育・学生支援機構

実施期間：2018年12月3日～2019年2月28日 配布数：1507、回収数：611（回収率40.5%）

【はじめに、基本的なことからについてお伺いします】

Q1 貴機関名（企業名等）をご記入ください。

Q2 ご記入なさる新卒採用ご担当者様が所属する部署名をご記入ください。

Q3 現在、貴機関において、2016年3月～2018年3月群馬大学卒業生（大学院修了生を含む）が勤務されていますか。

1. 勤務している 2. 勤務していない NA

「1. 勤務している」と回答された皆さまは、Q4へお進みください

「2. 勤務していない」と回答された皆さまは、これで質問は終了です

Q4 2016年3月～2018年3月群馬大学卒業生（大学院修了生を含む）の正規雇用の採用人数の合計につきまして、あてはまる番号1つをお選びください。およその人数でも結構です。公立学校の場合は、教育委員会単位の採用人数をお教えてください。

	1～5人	6～10人	11人以上
A 教育学部・教育学研究科・特別支援教育特別専攻科	<input type="text" value="62"/>	<input type="text" value="2"/>	<input type="text" value="4"/>
B 社会情報学部・社会情報学研究科	<input type="text" value="98"/>	<input type="text" value="3"/>	<input type="text" value="1"/>
C 医学部医学科・医学系研究科	<input type="text" value="21"/>	<input type="text" value="3"/>	<input type="text" value="2"/>
D 医学部保健学科・医療技術短期大学部・保健学研究科	<input type="text" value="60"/>	<input type="text" value="6"/>	<input type="text" value="1"/>
E 理工学部・工学部・工業短期大学部・理工学府・工学研究科	<input type="text" value="291"/>	<input type="text" value="11"/>	<input type="text" value="8"/>

貴機関が自治体、教育委員会、学校の場合はQ10へお進みください

それ以外の場合はQ5へお進みください

Q5 貴機関の本社・本店・本拠地等所在地の都道府県をご記入ください。外国の場合は国名をご記入ください。

_____ 群馬県 東京都 関東（群馬県、東京都以外）
 その他国内 国外

Q6 貴機関の主たる業種について、あてはまる番号1つをお選びください。

1. 農業・林業 2. 漁業 3. 鉱業、採石業、砂利採取業
 4. 建設業 5. 製造業 6. 電気・ガス・熱供給・水道業
 7. 情報通信業 8. 運輸業、郵便業 9. 卸売業、小売業
 10. 金融業、保険業 11. 不動産業、物品賃貸業
 12. 学術研究、専門・技術サービス業 13. 宿泊業、飲食サービス業
 14. 生活関連サービス業、娯楽業 15. 教育、学習支援業
 16. 医療、福祉 17. 複合サービス事業
 18. サービス業（他に分類されないもの） 19. 公務（他に分類されるものを除く）
 20. その他

Q7 貴機関の正規雇用者数について、あてはまる番号1つをお選びください。

1. 30人未満 2. 30人以上100人未満
 3. 100人以上300人未満 4. 300人以上1,000人未満
 5. 1,000人以上5,000人未満 6. 5,000人以上10,000人未満
 7. 10,000人以上

Q8 貴機関に正規雇用者として勤務する群馬大学出身者（大学院出身者を含む）の出身学部（大学院の場合は研究科・学府）の人数について、あてはまる番号1つをお選びください。およその人数でも結構です。

	1～5人	6～10人	11人以上
A 教育学部・教育学研究科・特別支援教育特別専攻科・特殊教育特別専攻科	<input type="text" value="63"/>	<input type="text" value="6"/>	<input type="text" value="4"/>
B 社会情報学部・社会情報学研究科	<input type="text" value="116"/>	<input type="text" value="8"/>	<input type="text" value="4"/>
C 医学部医学科・医学系研究科	<input type="text" value="29"/>	<input type="text" value="4"/>	<input type="text" value="10"/>
D 医学部保健学科・医療技術短期大学部・保健学研究科	<input type="text" value="47"/>	<input type="text" value="10"/>	<input type="text" value="9"/>
E 理工学部・工学部・工業短期大学部・理工学府・工学研究科	<input type="text" value="213"/>	<input type="text" value="55"/>	<input type="text" value="62"/>

Q9 貴機関の資本金につきまして、あてはまる番号1つをお選びください。

1. 3,000万円未満 2. 3,000万円以上1億円未満
 3. 1億円以上10億円未満 4. 10億円以上100億円未満
 5. 100億円以上 6. 該当しない

【貴機関で勤務するために必要な能力についてお伺いします】

Q10 貴機関で学卒者（大学院修了者を含む）が仕事をするために必要な能力・資質A～Jのそれぞれの項目について、あてはまる番号1つをお選びください。

	とても必要 である	やや必要で ある	あまり必要 ではない	まったく必 要ではない
A 専門的学識・技能	203	223	79	7
B 幅広い教養	123	340	50	0
C 問題に対して多面的・総合的に判断する力	352	159	3	0
D 論理的思考力	281	221	10	1
E コミュニケーション能力	414	98	1	1
F 社会人としての自覚	317	188	8	0
G 国際的に働くための力量	42	231	207	31

【貴機関で勤務する群馬大学出身者についてお伺いします】

Q11 貴機関で勤務する群馬大学出身者（大学院出身者を含む）の能力・資質A～Gのそれぞれの項目について、他大学出身者と比較してあてはまる番号1つをお選びください。

	群馬大学出身者は他大学出身者と比較して			
	とても優れ ている	やや優れて いる	やや劣って いる	とても劣っ ている
A 専門的学識・技能	175	267	21	0
B 幅広い教養	116	310	35	0
C 問題に対して多面的・総合的に判断する力	143	283	35	1
D 論理的思考力	171	264	26	0
E コミュニケーション能力	158	246	56	3
F 社会人としての自覚	154	260	47	1
G 国際的に働くための力量	41	269	132	2

Q12 貴機関で勤務する群馬大学出身者（大学院出身者を含む）の具体的な職務遂行能力A～Iのそれぞれの項目について、他大学出身者と比較してあてはまる番号1つをお選びください。

	群馬大学出身者は他大学出身者と比較して				
	とても 優れて いる	やや優 れてい る	やや劣 ってい る	とても 劣って いる	該当し ない
A パソコンで文章を作成する	133	294	14	0	14
B パソコンでデータの集計・分析や図表作成を行う	134	280	15	1	26
C 会議等でプレゼンテーションや報告を行う	100	276	51	1	30
D 職場内の同僚等と話し合いや打ち合わせをする	127	280	47	3	1
E 顧客、患者等と応対や交渉をする	98	259	58	4	37
F 人（後輩、アルバイト、生徒等）を教育・指導する	88	263	50	2	53
G 業務に関して企画・提案をする	87	281	61	1	25
H 複雑な事柄を総合的に考えて判断を下す	106	275	62	0	13
I 主体的に学習する	148	285	23	0	2

Q 1 3 群馬大学の教育に望むことがありましたらご自由にお書きください。

アンケートは以上です。ご回答ありがとうございました。

教学IRレター vol.1



教学 IR レター vol.1

群馬大学 大学教育・学生支援機構
教育改革推進室 二宮 祐・幾田 英夫
(内線：7521)

2018年11月発行(第1号)

巻頭言

このたび『教学 IR レター』を発行することとなりました。

我が国の高等教育は大綱化以降、法人化・IT技術の進展・グローバル化の波を受け大きく変革しております。また政府財源の緊迫化により運営費交付金が年々減少するなど大変厳しい環境にあります。

我が群馬大学におきましても、この流れの中にあります。

群馬県は、近年ネット上では何かと異端の地の扱いをされ、これが魅力度ランキングなどに反映される結果となっています。群馬県内の皆様には本当の様子はわかっているもの、それでも人口流出の動きは止まっています。「力あわせる 200 万」と上毛かるたにはありますが、それも今は外国人を入れて 198 万人というところまで減ってしまいました。

地域に根ざす群馬大学としましては、群馬県を支える教育の一大拠点としての自覚の下に教育・研究を行うミッションがあります。しかしながら、複雑化する現代社会の中で大学を取り巻く問題が見えづらくなってきているところがあり、どのような教育・研究を行っていけばよいのか、判断が難しい時代となってきているのではないのでしょうか。

IRとはそのような要請に応えるべく存在しています。IRとは1960年代のアメリカに歴史を求めることができるそうですが、要は大学の戦略決定や適切な業務遂行に必要な情報を収集し、分析して利用可能なものとして学内関係者に提供する部署のことです。当初から実践が重んじられてきたため、学問的にも整理されてきた分野でないため、定義すら確定的なもの

はありません。そのため我が国の大学のIRのあり方も各大学で千差万別とっていい状況にあります。

群馬大学では平成28年7月に、大学教育・学生支援機構の中に教育改革推進室を新設し、二宮祐准教授を招聘して教学IRへの準備を行ってまいりました。

このたび教学IRがようやくスタートする運びとなりました。本学の教育改善に資する情報を提供できるよう努力してまいります。

教職員の皆様方のご協力のほどよろしく願いたします。

教学IRとは

さて、その「教学IR」ですが、そもそもなんなんって方も多いと思います。

IRとはInstitutional Researchの略です。世間ではIRというと、投資の世界で企業の業績などをデータで説明することの用語として使われることが一般的です。大学の世界でもエビデンスを基に経営することが重要とされ、このエビデンスを専門的に取り扱う組織や職員が設置される動きになっています。

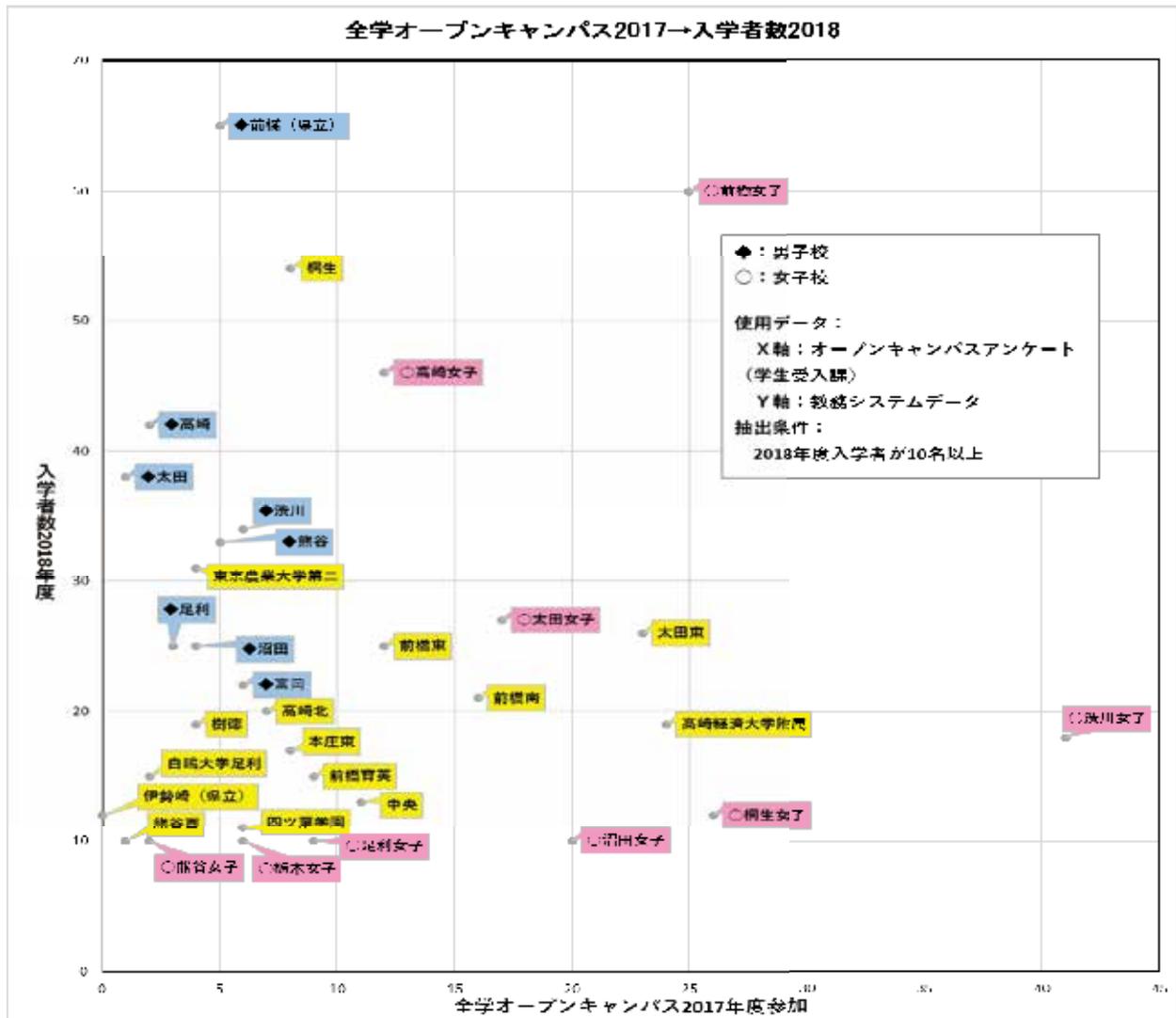
本学の教学IRもこの流れの中で動いてきたものであります。

「教学」ですので、本学の教育面を中心に有用なデータを提供できればと考えております。

それと同時に、データ作成に関しまして、関係各所で所有していますデータを利用します。データ提供のお願いにあがりましたときにはぜひともご協力のほどよろしく願いたします。

(ウラもぜひご覧ください。)

特集 全学オープンキャンパスと学生入学 データから見える群馬大学への進学の実状



目的：オープンキャンパスと実際に入学する学生にはどんな関係があるのでしょうか？本学の入試戦略上参考になるデータを両者から考察します。

使用データ：全学オープンキャンパス「群馬大学1日体験デーGU'DAY2017」参加者アンケート 高校別参加者数・教務システム 2018年度入学者データ

この結果から言えること

以下の2点について言えると思います。

第一に、主に男子校においては全学オープンキャンパス参加に消極的です。全学オープンキャンパス参加者が少ないにもかかわらず入学は多いことからして、男子校では全学オープンキャンパスが本学を志望する契機となっているとは言いがたいです。

第二に、女子はそれなりに全学オープンキャンパスに参加しています。以上の2点から、全学オープンキャンパスは女子学生をメインに考えたほうがいいのかもかもしれません。